

両親からの期待と子どもの期待に対する反応の関係 — 親子関係に着目して —

遠山孝司

I. 問題と目的

子どもに対する教育活動の中で、親や教師といった教育を行う側の人間は「このような人間に育って欲しい」、「このような人間に育てなければならない」といった教育目標をもつ。そして実際に親や教師、学校の教育目標は、子ども自身の目標に影響を与えるようである(Ames, 1992; Maehr & Midgley, 1991; Roeser, Midgley, & Urdan, 1996)。しかし、教育目標とは教育を行う側である親や教師、学校の目標であり、教育をうける側である子どもの目標ではない。山口(1989)は、思春期・青年期の学生の「自分がどのようになりたいか」という自己期待と、父親、母親からの期待の間に質的、量的なずれが存在することを示している。ここから教育目標はすべてが子どもの目標として受けいれられてはいないと考えられる。だが、親や教師にとっては、教育目標や期待は子どもの目標として受けいれられることが望ましい。

教師－生徒関係についての研究(Good & Brophy, 1972; Goodenow, 1993; Midgley, Feldlaufer, & Eccles, 1989; Silberman, 1969)は総じて、教師－生徒関係がよい場合に教師の期待にこたえるような目標を生徒が持つことを示唆している。しかし、親子関係について以下の2つの研究結果は一見矛盾している。Steinberg, Lamborn, Dornbusch, & Darling(1992)の結果は親子関係がよい場合に、Mize & Pettit(1997)の結果は母子関係がよくない場合に、それぞれ子どもによる親の教育目標の受けいれが促進されることを示唆しているのである。そこで本論では小学生と中学生を対象とし、子どもと父親、母親との「関係のよさ」が子どもによる父親、母親の教育目標の受けいれに与える影響を扱う。

教育目標が子どもの目標として受けいれられる過程で、親や教師の働きかけの内容がどれほど規範的であっても、子どもが目標として受けいれるかどうかは子ども自身の判断にゆだねられている。このように教育目標は子どもにとってあくまで“期待”に過ぎない。そこで本論では子どもが父親、母親の教育目標を自らの目標とする過程において、教育目標はまず“期待”として認知されるとし、父親、母親の教育目標として子ども自身が認知した父親、母親の期待を扱う。

II. 研究1

<目的>小学生、中学生を対象とし、子どもが認知して

いる父親、母親の期待と子ども自身の目標の関係が、子どもの認知している父子・母子関係によってどのように異なるのかを検討する。

<方法>質問紙：①父子・母子関係項目群－小学生、中学生の認知している父子関係、母子関係についての項目群。父子関係、母子関係それぞれ6項目、4段階評定。③目標項目群(小学生／中学生版)－小学生、中学生の自身の目標についての項目群。43項目、4段階評定。③父親・母親期待項目群(小学生／中学生版)－小学生、中学生の認知している父親・母親の期待についての項目群。目標項目群と同一内容。父親期待、母親期待それぞれ43項目、4段階評定。

対象：小学5年生53名(男子27名、女子26名)、6年生115名(男子54名、女子61名)、中学1年生142名(男子82名、女子60名)、3年生121名(男子63名、女子58名)。

分析方法：父子／母子関係の評定によって父子／母子関係の良好群と不良群を選出。それぞれの群の期待と目標の相関を比較。

<結果・考察>目標項目群、父親・母親期待項目群について、因子分析の結果、小学生では2因子、中学生では3因子が抽出された。小学生の2因子は第1因子から順に「理想的目標、父親／母親の理想的期待」、「規範的目標、父親／母親の規範的期待」と命名した。検定の結果、父子関係の不良群は良好群よりも全ての内容について、期待と目標の相関係数が有意に高かった。また、母子関係でも不良群は良好群よりも理想的な内容についての期待と目標の相関係数が有意に高かった。中学生の3因子は第1因子から順に「性格特性目標、父親／母親の性格特性期待」、「進路・学業目標、父親／母親の進路・学業期待」、「規範目標、父親／母親の規範期待」と命名した。検定の結果、父子関係の良好群は不良群よりも、規範に関する内容についての期待と目標の相関係数が有意に高いことが示された。

小学生、中学生の父子関係、母子関係の群別の目標と期待の得点の散布図において、小学生の親子関係がよい場合は、理想的、規範的な内容についての期待と目標はどちらも高得点に集中していた。小学生の親子関係がよくない場合は回帰直線に当たるよりのよい散布を示した。中学生の性格特性についての期待と目標は小学生の期待と目標の散布と同様の傾向を示していた。しかし進路・学業と規範については親子関係がよい場合に回帰直線に当たるよりのよい散布を示し、親子関係がよくない場合

両親からの期待と子どもの期待に対する反応の関係

は親子関係がよい場合に比べ、親の期待と子どもの目標が無関係に広がっていた。ここから中学生の親子関係がよい場合はよくない場合より進路・学業と規範に関して子どもの目標が親の期待に影響を受けていると考えられる。

これらの結果から小学生は親子関係がよい、よくないに関わらず、認知している父親、母親の期待と自らの目標は結びついていると考えられる。親子関係がよい場合に認知している父親、母親の期待と自らの目標はどちらも高いようである。また中学生は親子関係がよい場合はよくない場合より子どもの目標は親の期待に影響を受けるようである。

III. 研究 2

＜目的＞研究 1 の被験者一部を対象とし、小学生、中学生が認知している父子関係、母子関係と、日常生活の中で意識している父親、母親からの期待に対してこたえようと思うかどうかの関連を検討する。

＜方法＞質問紙：①日常生活で意識している親の期待—小学生、中学生が日常生活で意識している父親、母親それぞれの期待の内容。文章完成法。記述はそれぞれ最多で10まで。②期待にこたえようと思うかどうか—記述した期待の内容それぞれについてこたえようと思うか思わないか。2段階評定。③期待にこたえようと思う理由、思わない理由—①、②で記述し、評定した期待に対してこたえようと思う／思わない理由。文章完成法。ただしこれについては研究 3 で扱う。

対象：小学 6 年生 94 名（男子 40 名、女子 54 名）、中学 3 年生 118 名（男子 61 名、女子 57 名）。この被験者は研究 1 の調査にも参加。

分析方法：研究 1 で用いた父子・母子関係項目群をもとにした「父子／母子関係得点」と、日常生活で意識している父親、母親の期待に対してこたえようと思うかどうかの評定をもとにした、「父親／母親期待肯定得点」、「父親／期待否定得点」、「父親／母親期待記述数」、「父親／母親期待割合得点」との相関を検討。

＜結果・考察＞小学生、中学生のどちらにおいても親子関係がよい方が日常生活の中で意識している親の期待にこたえようと思うという傾向が部分的に示された。これらの結果は小学生については研究 1 と一致しない。

IV. 研究 3

＜目的＞研究 1 の被験者一部を対象とし、小学生、中学生が実際にはどのような理由にもとづいて親の期待に対する態度を決定するのか探索的に検討する。

＜方法＞質問紙：研究 2 と同じ。研究 3 では、③期待にこたえようと思う理由、思わない理由についての回答を分析対象とした。

対象：研究 2 と同じ。

分析方法：回答をもとにカテゴリを作成。その後カテ

ゴリーごとの使用頻度を比較。

＜結果・考察＞小学生、中学生の親の期待に対してこたえようと思う、思わない理由として、「内容の正当性」、「現状や能力との比較」、「自己の志向性」、「利益と不利益」、「他者の利益、他者との関係」の 5 つのカテゴリを採用した。親子関係以外にこれらのような 5 つの要因が親の期待にこたえようと思う／思わないという決定に影響する可能性が考えられる。小学生と中学生の理由の頻度に共通する特徴として、①理由の頻度に関して父母間で大きな違いが認められない、②「自己の志向性」、「利益と不利益」に類する記述が多くみられるが、「他者の利益、他者との関係」に類する記述は他のカテゴリに比べて少ない、③「利益と不利益」に類する記述が期待にこたえる理由としては多くみられたのに対し、期待にこたえない理由にはほとんどみられない、などが示された。ここから、①誰からの期待なのかということが子どもの期待に反応を決定する際の理由に影響しない、②小学生や中学生は親の期待に対する態度を決定する際に利益や不利益については比較的考えるが、他者の利益、他者との関係などについてはあまり考えない、③小学生、中学生に対する教育的な方略として、子どもに対して期待の内容にこたえることに伴う利益と、こたえなかつた結果としての不利益を教示することで、子どもはより積極的に期待にこたえようとするなどの可能性が示唆された。

V. 総合考察

本研究の結果から、子どもが認知している父親、母親との関係は、子どもが認知している父親、母親の期待と子ども自身の目標の関係および、子どもが認知している父親、母親の期待にこたえようと思うかどうかに影響を与えていたといえる。中学生に関しては親子関係がよい場合に子どもは父親、母親の期待にこたえている。しかし、小学生に関しては、一見矛盾した結果が示され、親子関係がよい場合に必ずしも親の期待にこたえるようになるわけではない可能性が示唆された。この原因として、「扱った内容の違い」、「親の期待の意識レベルの違い」、「社会的望ましさの影響」などが考えられる。ここから期待にこたえようと意識してこたえるという状態と、意識はしていないが期待にこたえているという状態を異なるものとして比較する研究、評定課題と文章完成課題に対して回答する際の子どもが親や教師の期待を意識しているレベルの違いについて留意した研究などが今後待たれる。さらに研究 3 の知見から、「利益や不利益」、「自己の志向性」、「内容の正当性」、「現状や能力との比較」といった「親子関係のよさ」以外の親の期待の受け入れを促進または抑制する要因がもたらす効果についての研究も今後必要であろう。